

## 美しき清流は太古の森の雫より

### 第九話：山女の巻き（本流編）

秋茜が飛び回り、首を垂れた稲穂が黄金色に輝き、栗の実が今にもこぼれ落ちんとする時期を迎える。秋川や奥多摩の上流部まで遡上して渓谷で夏を過ごした鮎も産卵に向けて下流域へと落ち始めて行きます。山女達も同じく産卵を前に食欲旺盛な時期となります。特に秋雨で増水したときの食欲は計り知れず、夏場の警戒心が嘘のように別の種に変化したかと思わせる程です。

「チャラ三郎」は奥多摩の山の恵みを求めて山に入ります。最後の奥多摩マタギであった「松和」爺から教わった木々を巡回するのがこの時期の仕事でもあります。



午前中に舞茸を背負い山を下りると「チャラ三郎」は決して松和爺の家に行き山の状況を報告しては山のことを教わっていました。

山で遭難した人を救助した話や、熊射ちの話などを良く聞かされたものでした。

これは 20 数年前に松和爺から聞いた話ですから、今から 50 年も前の話です。9 月末になると、泉水谷が丹波川本流と出会うその先に手取淵という大きな淵があり、その淵で大岩魚を何匹も釣り上げたという話です。

岩魚の体調は 60cm を超えるものも珍しくなかったということです。勿論この大岩魚の魚拓も見せて貰いましたので本当の話です。

今では、尺(30cm)を超える魚体と出会う事でさえ、早々にあるものでも有りません。

9月の長雨による増水で石垢が流されてしまうと、どんな名人でも鮎竿を置き、土手から呆然と川を見つめ、川の回復を自然任せに待つより他はありません。

しかし、「チャラ三郎」はこんな時でも体を休ませることなく、自然のもたらす恵みを求めて禁漁前の奥多摩へと車を走らせます。



春先に対面し、再会を誓ってリリースしたチビ山女達との再会を楽しみに沿道脇の辿道を本流へと下りながら、久振りに我が家に戻ったような気がした「チャラ三郎」でした。

「よっしゃ、今日もやりまっか」

「チャラ三郎」は秘技：ナチュラルドラフト送り込み釣法を炸裂させます。

思えば、この「秘技ナチュラルドラフト送り込み釣法」も松和爺からヒントを得た技法であり、あのとときの会話は今でも頭から離れるものではありません。

「チャラ三郎、またバラしてやがる」

「俺ら一遊びで釣りをしているんでねえ」

「掛けた魚をバラしてたんじゃ、おまんまの食いそびれよー」

「口で合わせるからだ……………」

その時は、気づかなかったのですが場数を踏むごとに、掛けバラシの率が気になりだし、その度に「口であわせるからだ……………」が頭の中を駆けめぐり自問自答を繰り返し、結果「ナチュラルドラフト送り込み釣法」に辿りつく事ができたのでした。

喰わせるまでは、自然に流し、喰う直前に送り込みを開始する、勿論「喰い位置」と「送り込みの方向」を予め予測するだけの経験があって出きる技法です。

爆裂、爆裂、スレ枯らしの奥多摩山女も容赦なし。



すっかり成長した山女達との再会を終え奥多摩路を後にしました。

「秋川チャラ三郎」